

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

2013年、平成25年が始まりました。今年の初詣は大変に人出が多かったです。長く続く不況や外国との緊張関係があるなか、政権が交代し、経済・外交にも変化が生じそうで、うっすらと期待感をもって行列に並ぶひとが多いような雰囲気を感じました。私自身も心新たに今年一年を頑張ろうという気持ちになりました。

医局ではそろそろ次年度の人事が決まる時期でもあり、連日医局員との面談を行なっています。関連病院にも人気・不人気があり、最近の傾向としては、症例の多寡ではなく懇切丁寧に指導してくれる施設の人気の高いようです。逆に症例数が沢山あっても指導医が忙しすぎるころは希望者が少ないです。確かに自分の頃を思い返しても、毎週2～3例手術症例数が当てられる施設は嬉しかったです。逆に週1例の手術担当の施設であっても、論文を調べたり手術以外の検査に時間をかけたりできたので深く記憶に残っています。そういうときに指導してくださった先生には何年たっても感謝の気持ちを忘れることはありません。

本号には、原著1編、症例報告9編、臨床経験1編の合計11編の論文が掲載されました。多くの原稿が寄せられ、厳しい査読の中から選ばれた論文です。編集委員の先生方は目が肥えていらっしゃるの、コメントも厳しいことが多いのですが、基本的に世話好きな外科医であり、指導的立場で苦勞されている方が多いのでなるべく採択できるように親身のコメントを付けてくださっています。中には、30行以上に及ぶ長文のコメントもあり、その姿勢には見習うところ大であります。

いうまでもないことですが、学術論文は本文のクォリティが高いことが採択の第一条件です。しかし、査読者への返事こそが最大の難関だと再認識しております。返事の書き方で採用・不採用が決まるといっても過言ではありません。自分が査読していても、『こういう返事は上手いなあ』と唸られることがしばしばあります。卑屈にならず、自分たちの主張を新しい切り口で提示されると、『これは絶対に指導者が一字一句checkしたreplyだな』と確信し、ついつい採用にしてしまいます。反対に論旨が一貫せず、誤字・脱字が多く、いかにも指導者がcheckしていないと思われる論文の再査読に当たると、『ああ、この子はちゃんと指導してくれる上司がいなくて可哀想だな』と勝手に思ってしまう。後輩の教育とは手のかかるものだと日々実感しておりますが、手術手技を教えるのと同じ情熱で論文指導をしていただければと思います。指導医の情熱は指導を受けている若い人だけでなく、査読者にも必ず伝わります。

本誌は邦文誌最高峰を目指しています。指導医の先生におかれましては本誌に投稿することが若い人のインセンティブになるようにご指導いただきまして、これからも数多くの論文を投稿していただくことを期待しております。

本年もよろしく願い申し上げます。

(遠藤 格)  
2013年1月1日